

夏から秋の入り口へ

7月は、高山植物の花が一番多くみられる月です。

例年、姿見の花は上・中旬、裾合の花は下旬にだいたいピーク、とお伝えしています。しかし、今年は6月初旬の猛暑で雪融けが一気に進んでしまいました。エルニーニョ現象で寒い夏が予想されてはいますが、それでも今年のチングルマの開花は1～2週間前倒しになりそうな勢いです。

「裾合平の『花畑』のベストを見たい」というなら、7月中旬に何度か足を運んでもみるのがベストでしょう。しかし1回だけなら下旬より中旬ごろに賭けたほうが有利だと思います。

チングルマの花は、7月末ではあらかた終わり、ヨツバシオガマやミヤマサワアザミの花がところどころに揺れる『野原』になっていそうな予感がするからです。

高山帯では、6月から9月の間に慌ただしく「春～夏～秋」が過ぎていきます。7月の末は、



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然解説員などで活躍する人々をリレーしています。



白一面に咲き誇るチングルマの花畑

一日の長さが月初めより約30分間短くなりますが、高山の生き物にとっては「たった30分」ではないようです。月末に咲く花は青いリンドウや黄色のキクの仲間が中心となり、野鳥の声も違います。早くも初秋の情緒が漂い始めます。

旭岳ビジターセンター 菊地 基



本で知るふるさととの山

恩人と出会った「初めての大雪山」

山三昧を続ける札幌在住、高澤光雄さんの山への思いを書きつづるスピードは、2年前に傘寿を過ぎてからいよいよ加速してきたようです。近々では「山の本」(2014夏号)に「下ホロカメツク山へ」、「山書月報」(2014年3月号)に「日本山書に入学—それから四十七年を回顧して—」を寄稿しています。

北海道の登山史を徹底的に調べて書き残すというこの分野で第一人者となってきたが、俳句、絵心にも優れ、十数年、俳誌「道」に随想「山旅句」の健筆を振るっています。



山「北海道の登山史」著書「山旅句」と、膨大な執筆をまとめた「高澤光雄著作選集」

「真夜中、ドスン、ゴー、と不気味な音で目を覚ます。驚いたことに川は増水、濁流が天幕のすぐ脇を流れている」「水嵩(かさ)はみるみる増え、伐採された丸太が、ドスン、ドスンと岩にぶつかりながら勢いよく流れてくる」。

命からがら松山温泉に着き、事の次第を話して温泉に入ってもらい、朝食までご馳走になります。「学生はこれから金が必要になる」といって、宿の主人、佐藤門治さんはお金を受け取りません。

勇駒別では道に迷って白雲荘管理人、工藤虎男さんの世話になり、悪天候下の黒岳縦走では、旭川東高校生を引率していた速水潔さんに遭難寸前に助けられます。

高澤さんは、登山を始めて間もないころに助けられた恩返しをしたいと東川町に山関係の文献や昔の大雪山絵葉書、パンフレットなど貴重な資料を山ほど寄贈してくれました。そして今「大雪山讃歌」を執筆中です。

「愉しき山旅」(北海道出版企画センター刊)の中に「初めての大雪山」があります。高澤さんが高校3年の夏休み前に、仲間6人で大雪山に挑んだ記録です。

バスの終点、東神楽町志比内から松山温泉(天人峡温泉)に向かって五里(約20キロ)をとぼとぼ歩き出すと土砂降りに遭い、コンクリート橋の下に逃げ込んで野営となります。

町史編集専門員、西原義弘